

2. 過去10年間の泌尿器科における漢方製剤の使用状況の検討

岩手医科大学医学部 泌尿器科学講座
○大森 聡、丹治 進、藤岡 知昭

岩手医科大学泌尿器科における漢方製剤の使用状況を調査した。

【対象と方法】2002年から2011年における泌尿器科より処方された漢方製剤の全処方を調査し、漢方製剤の種類と覚せい剤の処方量の推移を経時的に検討した。

【結果】過去10年間で42種類の漢方製剤が処方されていた。全処方数としては2004年の1279包をピークに漸減傾向で2011年では696包とほぼ半減していた。製剤別処方数としては、猪苓湯(3915包)、牛車腎気丸(2298包)、柴苓湯(1136包)、大建中湯(995包)、補中益気湯(636包)が上位5製剤であったが、大建中湯以外の4製剤は全て処方数の減少がみられた。猪苓湯、牛車腎気丸は2003-2004年のピークに、柴苓湯は2007年以降の減少が顕著であった。一方、大建中湯、桂枝茯苓丸、芍薬甘草湯、六君子湯は処方数の増加傾向を示した。

【考察】猪苓湯、牛車腎気丸の処方減少の時期には、前立腺肥大症に対する新規 α ブロッカーや過活動膀胱に対する新規抗コリン薬承認が重なっていた。また柴苓湯減少の時期に一致して慢性腎臓病ガイドライン発表があった。新規薬剤やガイドライン発表による処方内容の変化がこれらの製剤の処方動向に関係しているものと思われた。一方で外科治療の増加や化学療法が多様化を背景とした治療補助薬としての漢方製剤のニーズの高まりが示唆された。これらの傾向をより検討して報告する予定である。